

4 知識について

知識とはどのようなものを最初に組織的に考えたのはプラトンである。彼は『メノン』で知識と正しい意見の間には何の違もないと述べている。『テアエテトス』では知識とは知覚と同じであるとする考えからスタートする。知覚は何ら意味論的な構造をもっていないゆえに、知識が知覚なら、知識を述べることができないゆえ、否定される。次に、信念は感覚的印象の意味論的に構造化された連結と想定され、知識はそのような真なる信念ではないかと提案する。だが、プラトンはこれに対してもどのように印象が連結されて意味論的構造が与えられているかわからなければ、真や偽の区別が信念に対してなされる理由がないとする。それで考えられたのがラッセルの論理的原子論に匹敵する理論で、命題と対象は単純な感覚的印象から論理的に構成された複合物であると捉えられる。アリストテレスは基礎づけ主義を最初に提唱し、すべての知識には基礎となる基本的な出発点があると考えた。その後、知識は認識論的転回の主人公となり、多くの哲学者によって哲学の主要な課題として研究されてきた。認識論 (epistemology) の語源を探ると、ギリシャ語の *episteme* が知識、*logos* が説明であるから、認識論は知識についての説明ということになる。実際、知識とは何か、私たちはどのようなものを知り得るか、知識はどこから来るか、といった問題に対して、これまで様々に議論されてきた。この章では知識論 (theory of knowledge = epistemology) についての基本的な事柄を考えてみよう。

簡単にこの章の内容を述べておく。まず、ゲチアの問題を紹介し、次にそれ以前の知識の特徴づけをあらためて考えてみよう。そして、デカルト、ヒューム、カントの基礎付け主義による知識の特徴づけがどのようなものか見てみよう。それに平行して、ゲチア問題を通じての新しい知識の理論としての信頼可能性理論も取り上げてみよう。また、ゲチア問題は懐疑論にも密接に関連するので、ヒューム以来の懐疑論とその克服の試みを探ってみよう。

<本章で考えること>

そのまま入る

1 知識とは何か

[「知る」ことの多様な種類]

知っていること、知っているものは「知る」ことの結果であることから、知識は「知る」ことの分析を通じてその特徴を明らかにすることができる。実際、知識は私たちの知り方に応じてさまざまに分類されてきた。その代表的な分類は二つあり、「何であるか」の知識 (know-what knowledge) と「どのようにするか」の知識 (know-how knowledge)、そして、命題的な知識 (propositional knowledge) と命題的でない知識 (non-propositional knowledge) である。二つの分類は同じ分類に見える。名人の技は命題で表現できないように思えるし、「何であるか」という事実についての知識は命題によってしか表現できないように見えるからである。しかし、二つが同じ分類かどうかはわかっていない (5章の感覚質を参照)。また、「私は彼女の父を識っている」というように、面識がある、親しいといった「知る」の意味も忘れてはならない。

(問) 次の文はどのような知識を表現しているでしょうか。

物理学を知っている

日本の首相を知っている

自転車の乗り方を知っている

彼の怒りを知っている

自分の生き方を知っている

上の問いから気づく点がある。「自転車の乗り方を知っている」とわざわざ言うだろうか。「自転車に乗れる」というのが普通であろう。通常、「どのようにするか」のコツや技術は「知っている」とは言わない。また、同じように「怒りを知っている」とも言わない。「怒りがわかる」といった言い方をするだろう。このように、私たちの「知っている」の使い方は上の分類の一部に限定されている。ここで考える知識はより広い範囲のもので、事実に関する知識だけでなく、私たちが身につけることのできる知識すべてを含んでいると考えておこう。しかし、残念なことに知識の正確な範囲が確定しているわけではない。

[知識＝正当化された真なる信念]

ところで、知識、信念、真理 (Knowledge, Belief, and Truth) の間にはどのような関係があるだろうか。いずれの間にも強い関連がありそうである。知識には信念と真理が必要とされている。つまり、信念と真理は知識にとっての必要条件である。では、それらは十分条件か。この問いに対して次のような説を考えてみよう。それは知識についての「正当化された真なる信念」説である。正当化された信念とは、何らかの確かな方法で確認された信念である。実験や証言はそのような正当化の方法である。この説によれば、知識とは正当化された真なる信念 (Justified True Belief) である。この説の主張を具体的に述べれば次のようになる。

どのような個人 S 、命題 p についても、 S が p を知るとは次のことと同じである。

1. S は p を信じる
2. p は真である
3. S は p を信じる正当な理由をもつ

Box 真理に関する定義と解釈

[「正当化された真なる信念」への疑問]

さて、「正当化された真なる信念」説は正しいだろうか。この説が正しければ、正当化された信念と真理は知識の必要十分条件ということになり、私たちが常識的に考えている知識像が得られる。知識が単に信念や思いつきでないのは、それが正当化されている、証拠をもっている、理由をもっているからであると言われてきた。この伝統的な見解はプラトンの『テアエテトス』やカントの『純粋理性批判』において主張され、「知識とは正当化された真なる信念である」と要約さ

れてきた。そして、この要約は20世紀中葉までほとんどの場合に受け入れられてきた。この伝統的見解に対し、正当化された真なる信念であっても知識とは呼べない場合があり、したがって、知識の伝統的な分析は誤っていることを示したのがゲチア (Edmund Gettier, 1927-) である。¹ 彼は知識をもつとは言えないが、正当化された真なる信念をもつことができるような例をつくった。伝統的見解への彼の反例を見てみよう。

(物語) 事務所に勤めているAは、誰かが直に転勤することを知っていた。信頼できる上司が転勤するのはBであるとAに告げた。その時、AはBの財布に1万円あることも知った。そこで、Aは次のように推論した。

1. Bは転勤し、財布に1万円もっている。
2. だから、転勤する人は財布に1万円もっている。

このようにAが推論することは正しく、何も問題はないように見える。しかし、実際に転勤させられるのはAで、そのことをA自身は知らず、その時Aもちょうど財布に1万円もっていたとしてみよう。その時、Aは2を信じており、また2は真である。Aはそれを1から演繹したのであるから、2を正当な理由から信じることができる。1は偽であるが、Aはそれを真であると考え、十分な理由をもっている。したがって、(ゲチアによれば) Aは正当な理由をもとに2を真であると信じるが、Aは2を知らない。

命題の形をした知識は三つの、それぞれが必要で、それら連言が十分である条件をもっている。それらは正当化、真理、信念である。真理条件は、どんな知られた命題も真であることを主張している。正当化条件によれば、知られた信念は証拠によって支持されなければならない。さて、上の例は正当化された真なる信念をもっているが知識とは呼べないような例になっている。Aが正当な理由で1を信じ、それに基づいてAは2を信じる。1は論理的に2を含意し、Aはそのことを知っているのだから、Aには2を信じる十分な理由があることになる。そして、2は真である。しかし、Aは2を知っていない。

この推論の構造をわかり易く抜き出してみよう。1の命題を p 、2の命題を q とすると、

- 1 p は真でない
- 2 A は p を信じる
- 3 A は p を信じる正当な理由がある
- 4 $p \Rightarrow q$
- 5 A は $(p \Rightarrow q)$ を信じる
- 6 A は $(p \Rightarrow q)$ を信じる正当な理由がある
- 7 A は q を信じる
- 8 A は q を信じる正当な理由がある
- 9 q は真である
- 10 だが、A は q を知っていない

¹ E. Gettier, "Is Justified True Belief Knowledge?", *Analysis*, 1963, Vol.23, pp.121-23.

となるだろう。この例だけですべてわかるとはとても言えないので、次の簡単な例から信念と事実の間の微妙な違いを確かめてほしい。

(ラッセルの例) 公園の信頼できる時計：散歩の途中で公園の時計を見たら9時30分だった。あなたはそれまで毎日その時計を利用しており、それが信頼できる時刻であると信じていることができた。しかし、時計は一日前に止まっていたとしてみよう。それをあなたは知らない。信頼できる時刻9時30分をあなたは信じていることができるが、それが正しい時刻であることを知らない。

(伊作の例) 伊作はこれまで部屋の左のドア近くにあるスイッチで、電燈をつけていた。しかし、今日はそのスイッチが壊れている。伊作はそれを知らず、いつものようにスイッチを入れた。ちょうどその時、右のドア近くのスイッチを弟の史門が入れたために電燈がついた。伊作の信念は正しいが、それは事実と異なっている。

(問) ゲチアの反例、上の2例から、「信じる」と「知る」ことがどのような関係になっているか述べなさい。信じていることができて知ることもできない場合を考えなさい。

上の例に共通する点は、いずれの主人公も信じている命題に関するきわめて信頼できる証拠をもっているが、それが誤り得ないという保証はもっていないということである。ここから導かれるのは懐疑論 (Skepticism) である。では、どのような条件が満たされれば、あることを「知っている」、つまり、あることの知識をもつと言えるのだろうか。ゲチアの反例に対する対応にはさまざまなものがある。いきなり現代の対応を考える前に、知識を私たちはどのように捉えてきたのか知っておかなければならない。懐疑論は知識に対する懐疑であり、知識の存在を脅かしてきた。知識への懐疑とはどのようなことかを次節で考えてみよう。

2 知識への懐疑

[懐疑のレベル]

すべてのことを知っている人はいない。皆何らかの疑問をもって暮らしている。哲学は疑問を解くことであると述べてきたが、出発点の疑問は懐疑につながっている。正しいと思われている知識に対する疑問は懐疑である。これは哲学がいつも懐疑と共にあることを物語っている。懐疑論の歴史は長く、新しいタイプの知識に対して新しい懐疑論が提出され、懐疑論も知識の理論と共に変化してきた。プラトン流の懐疑論は、私たちは自身の直接的な経験から独立した実在を知ることができないという積極的な主張をもっている。ピロン (Pyrrho, 365BC-270BC) の懐疑論はより注意深く、私たちが知識をもつことを否定しないが、その判断を中止するように求める。あるタイプの命題を実際に知ることができないというのが第1レベルの懐疑とすれば、プラトンの懐疑は第1レベルの懐疑である。ピロンの懐疑はそれより弱いもので、あることを知ることができる、知ることができないという二つの相反する主張が同じような強さの根拠をもっていた場合、それについての判断を停止しようというものである。つまり、あるタイプの命題を知ること

ができるかどうか分からないという第2レベルのものである。

普遍的懐疑論は、私たちは何についても何一つ知ることができないと主張する。どこかで知識は可能だが、ここやその特定領域では不可能であるとするのが局所的な懐疑論である。局所的な懐疑論の典型は外部世界、他人の心、過去、神、倫理的な真理の知識についての懐疑論である。誰もこれらのいずれかを一度ならず疑ったことがあるだろう。ゲチアの例も正当化された真なる信念が知識にとって十分でないことを示すという点で、知識への局所的な懐疑である。懐疑は時には知識そのものに、時には知識の正当化に、そして両方に向けられる。通常、私たちが考える懐疑は第1レベルのものだろう。また、上の外部世界や他人の心の場合、しばしば第2レベルの懐疑が考えられている。

(問) 日常生活や科学研究で局所的な懐疑論が果たす積極的な役割を挙げなさい。知識の獲得に懐疑論はどのような役割を果たしているか考えなさい。

[懐疑の具体例]

懐疑論がもっともらしいという考えを以下に推論の具体例で調べてみよう。

推論 1

1. 地球が平らだという昔の人の信念は誤りである。
2. だから、昔の人は地球が平らなことを知らなかった。

推論 2

1. 地球が丸いという私たちの信念は誤りかもしれない。
2. だから、私たちは地球が丸いことを知らない。

上の二つの推論から、次のような三番目の推論が考えられる。

推論 3

1. もし推論 1 が正しいなら、推論 2 も正しい。
2. 推論 1 は正しい。
3. よって、推論 2 も正しい。

推論 1 も推論 2 も、そしてそれらを使った推論も懐疑論的である。だが、私たちは常識的に、推論 2 の結論は明らかに事実と異なるから、推論 2 は誤っていると考えるだろう。そう考えるなら、推論 3 から、対偶をとることによって、推論 1 も偽になる。だが、推論 1 は正しそうである。では、推論 3 は誤っているのか。推論 1 に隠れている仮定は、 S の信念 p が偽であれば、 S は p を知らない、である。しかし、推論 2 には別の仮定が必要で、それは、 S の信念 p が偽かもしれないなら、 S は p を知らない、というものである。異なる仮定が使われているのであるから、二つの推論は単純に組み合わせることができず、したがって、推論 3 そのものが誤りである。この例は懐疑論の主張そのものではないが、信念、知識が具体的に入り混じった推論がどのようなもので

あり、真偽、知識、懐疑がどのように絡み合っているかの一端をこの推論で理解してほしい。

ほとんどすべての懐疑論的な推論は、私たちが悪魔に騙されている、夢を見ているに過ぎない、桶の中の脳だといった、一見馬鹿らしい可能性に言及する。だが、しばしばこのような馬鹿らしい可能性が知識の本性についての謎を解く鍵を握っている。そこで、私たちがもつ信念に誤りがあり得ることから懐疑論に加担する議論を考えてみよう。すべてのものについて誤りの可能性があることはデカルトだけでなく、誰もが考えることである。次の推論はそのような代表例である。

1. 人が世界についてもつ（ほとんど）すべての信念は誤り得る。
2. 信念が誤り得るなら、それは知識にはなり得ない。
3. それゆえ、世界についての（ほとんど）すべての信念は知識ではない。

「(ほとんど)すべて」は例外があることを示唆している。そのような例外の候補は、「私は今ここにいる」、「 $2+3=5$ 」といったものだろう。また、信念が誤り得ることは、その信念が正当化できないことを意味している。この推論と似た結論は次のような識別不可能性を使った推論でも得ることができる。

1. 人が誤り得る証拠に基づいて知識をもち得るなら、知識と知識でないものを内観的に識別することができない場合があり得る。
2. しかし、内観的に知識でないものから識別できないような知識はあり得ない。
3. 1と2から、人は誤り得る証拠に基づいて知識をもつことができない。
4. しかし、外部世界に関する命題について私たちがもつ証拠はみな誤り得る。
5. 3と4から、私たちは外部世界についてのどんな知識ももつことができない。

この推論の1は確かに正しい。そして、4も正しいように見える。だが、結論5は受け入れがたい。このような推論は他にもつくりだすことができる。もう一つ推論を考えてみよう。

[伝達性あるいは閉包性]

- (a) 伊作は人工生命マシンにつながれた桶の中の脳である。
- (b) 伊作は腕をもっている。

という二つの前提のもとで、次の推論を考えよう。

1. 伊作は (a) が誤りであることを知らない。
2. (b) は (a) が誤りであることを含意する。
3. 伊作が (b) を知っているなら、(a) が何を含意するかも知っている。
4. だから、伊作は (b) を知らない。

3は知識が論理的な含意関係を通じて伝達されることを述べている。知識の伝達性とは、 a を知っていて、「 a ならば、 b 」が成り立っていれば、 b も知っている、ということである。つまり、知ることは含意関係に関して閉じている。この具体例が3である。伊作が腕をもっていることを知っ

ていば、彼が人工生命マシンにつながれた桶の中の脳であることが誤りであることを含意する。この含意関係を知っていれば、桶の中の脳である可能性を排除できないのであるから、腕をもっていることを知らないことになる。したがって、4が導かれ、懐疑論が正しいことになる。

知ることの含意関係を通じての伝達性あるいは閉包性は強すぎないだろうか。 P を知ることが P でないものの可能性すべてを排除するなら、私たちは周りの世界についてほとんど何も知ることができない。したがって、より妥当性の高い見解は、知識は関連する可能性だけ排除するというものだろう。では、関連する可能性はどのように決められるのか。

一つの見解は次のものである。関連する可能性はもっている証拠を越えた主体の環境の特徴からなるというものである。この点から、ノージック (Robert Nozick, 1938-2002) は閉包性に疑問を投げかける。閉包性の否定は後述の知識の信頼可能性理論に基づいている。彼は次のような条件を考える。

1. P が真でないとするば、主体は P を信じないだろう。
2. P が真だとすれば、主体は P を信じるだろう。

これら条件が満たされる場合、主体は P という事実を探知すると言われる。この条件を使って、ノージックは知る人の信念が偶然的ではない仕方では P という事実に関係していることを示す。そして、この説明を受け入れるならば、閉包性は成立しないと論じる。探知条件1と2が知識に必要なならば、閉包性は誤りである。というのも、探知条件自体は知ることの含意関係に関して閉じていないからである。つまり、ある事実を探知し、別の事実を探知しないことは、別の事実がある事実の帰結であっても可能なのである。伊作は腕をもつことを探知しながら、桶の中の脳であることは探知しないことができるのである。

[懐疑論の論駁例]

懐疑論の正しさを主張する推論はまだある。では、このような推論に対してどのような反論をすることができるのか。懐疑論の論駁も今まで色々考えられてきた。以下に懐疑論の論駁例を挙げてみよう。

I. 懐疑論は自己論駁的である。

懐疑論は私たちが何も知らないと主張するが、それでは懐疑論の主張の前提が真であることも知らないことになる。いつも誤り得ることを知らないし、証拠が誤り得ることも知らないことになる。したがって、懐疑論は自らの主張ができないことになる。

II. 知識は絶対的な確実性を要求するのか。

駅に向かって急いで歩いているとき、ドアに鍵をかけたことを知っているかと聞かれて、鍵をかけたと答えましょう。それは本当に確かかと再度聞かれて、自信がなくなり、確実かどうかわからないと答えたとする。最初の問いと二番目の問いは異なった問いで、したがって、異なった答えになっている。つまり、知識と確実な知識は異なった答えを要求している。だから、確実でない知識は可能であり、知識に絶対的な確実性を要求しなくても構わないことになる。

III. 可謬主義

上の確実性についての話から、誤りの可能性があっても知ることができると主張できる。知識

には理由が必要であるが、その理由に誤りの可能性を含めてもよいというのが可謬主義である。したがって、「信念が誤り得るとすれば、それは知識ではない」という既述の推論の前提は誤りということになる。だが、懐疑論は次のような反論をすることができる。

1. 可謬主義が真なら、人は知識をもっていることを知ることができない。
2. 可謬主義は真である。
3. だから、人は知っていることを知ることができない。

可謬主義者は 2 を正しいと思っているから、上の反論に答えようとするれば、1 を否定しなければならない。

(問) 上に挙げられている懐疑論の推論を論駁するにはどのような推論が考えられるかを懐疑論の論駁例を通じて考えてみなさい。

[他人の心についての懐疑]

最後に、他人の心についての懐疑論を見ておこう。緩やかな懐疑論は、他人の経験は私の経験に似ているか、という懐疑である。他人の経験の存在は認めるが、それが私の経験と同じかどうか疑われている。これに対して、強い懐疑論を考えることができる。それは、私の経験以外に経験は存在するか、という懐疑である。この強い懐疑論は次のような推論を生み出す。

1. 他人の心を直接に知ることができない。
2. 他人の心を推論によって間接的に知ることができない。

したがって、直接的にも間接的にも他人の心を知ることができない。

懐疑論を帰結する幾つかの推論を見てきたが、懐疑的な結論を避ける常識的な二つの方法は次のようにまとめることができるだろう。

- (a) 他人の心、身体、過去等は直接に経験でき、したがって、それらを知るのに推論は必要ない。
- (b) 知識にとって信念が形成される過程は必要ない。知識の内容はそれがどのように生み出されるかと言うことは独立である。

これらは懐疑論の論駁というより、回避に過ぎない。懐疑論の最後の推論を見て、1 と (a) を比較してほしい。正反対のことが主張されており、これでは水掛け論になってしまう。では、懐疑論の論駁のためにどのような知識の理論が生み出されてきたのだろうか。それを以下に見てみよう。この節では十分な結論を述べていない。以後の議論のために刺激が提供されたと考えておけばよいだろう。

(問) 懐疑論の論駁がなぜ必要なのかをまとめなさい。